

●三俣千町争奪戦の要

高城町のキャッチフレーズは「豊かな自然と歴史公園の町」。それを代表するのが高城城址公園と観音池、観音さくらの里である。その名は、近くの松峯山の石山観音にあやかっけて付けられた。石山観音は、古くから霊験あらたかな安産の観音としてあがめられてきた。また、「東の白隠、西の古月」といわれた佐土原の名僧・古月禪師が寛保三（一七四三）年、「日州亀石山福聚寺開山実庵和尚略行由記」を書き残したことも、同観音を有名にした。白隠とは江戸時代の禅僧である。

歴代島津家の尊敬も厚く、十八家久、十九光久、光久の長男・綱久の参拝記録も残っている。参道には島津家の紋の彫られた山門が立つ。さらにここには伝承が多く残っている。

聖徳太子を慕って渡来したという百済の日羅上人が、初めて亀石山と号した由来を示す亀の

甲の岩肌。白馬にまたがった神々が、岩を踏み砕き、堂の土地を開いたという馬のひづめ跡。どちらも堂わきの大きな岩壁に見ることができる。高城は、三俣院高城と呼ばれていた南北朝時代から、北郷忠相（ほんごう・ただすけ）が高城城主となった永禄二（一五五九）年ごろまでの約二百二十年間、戦火に囲まれた。後にこれを三俣千町争奪戦といい、高城は常にその要城であった。

現在、城跡には郷土資料館が建てられ、戦火の歴史と、薩摩藩財政再建のための寒天製造や、海運業などを物語る資料が展示されている。メインは肝付兼重と錦の御旗である。延元元（一三三六）年、南朝方兼重が、五辻宮（いつつじのみや）から拝領した日月の錦の御旗を城頭高く掲げ、武家方畠山直顕（ただあき）の大軍と戦った史実があるからである。



高城郷土資料館。歴史とロマンの物語を今に伝える

高城城址公園と石山観音寺や観音池を結んでいるのが古墳群を持つ牧之原台地。現在、この三つのゾーンを結び、「歴史とロマンの里」としての公園化が進められている。牧之原台地は古墳時代、諸県君牛諸井（もろかたのきみうしもろい）の牧場跡といわれ、その娘・髪長媛（かみながひめ）のブロンズ像が一号墳の前に建てられている。

台地に立てば、麗わしき髪長媛が、長い髪をながせながら、噴煙がたなびく霧島連山をバックに、名馬を駆っている姿が目に見えようである。

塩水流忠夫